

## 友松対談 ⑥

## 鎌倉校舎罹災見聞記

昭和40年1月13日未明、鎌倉雪ノ下にあった横浜国大学芸学部の校舎が火災で焼失しました。これは開学以来の懸案だった各学部の統合問題に、非常に大きな影響を与えた出来事です。当時国大の学生や附属の教官として、この出来事を身近に見聞された方々の体験談をお送りします。【平成24年1月記録】



### 体験談(1) 校舎火災と その後のこと

出席者 吉川 英達（昭和41年卒）  
小関 武三郎（昭和42年卒）  
司 会 黒川 鈴谷（昭和35年卒）  
（写真は左から、小関・吉川の各氏）

司 会 本日はお忙しいところをお出で頂きまして、有難うございます。早速お伺いしますが吉川さんは昭和何年に入学されたのですか。

吉 川 私は昭和37年に入学し、41年3月に卒業しました。

司 会 小関先生はその一年後ですから、昭和38年入学ですね。

小 関 そうです。私は38年に入学し、42年春に卒業しました。

司 会 お二人とも在学中に鎌倉校舎の火事に遭われ、校舎焼失の後は清水ヶ丘で授業を受けるという、まさに国大歴史の変換点の時代を経験された訳ですね。それでは早速火事のことを伺いましょうか。火事が起きたのは1月13日未明ということですが、授業はもう始まっていたのですかね。

吉 川 いやあ、始まっていないでしょう。

小 関 冬休みの始まりや終りなんて、学生の頃は始業式や終業式が在るわけでなし適当だからね。同級生の話では、スキーに行く途中の列車の中で国大火事のことを聞いたというから、まだ冬休み中だったでしょう。

司 会 吉川さんは、その頃蒼翠寮にいたのでしょうか。火事が起こったときの状況を覚えていますか。

吉 川 よく覚えていますよ。出火したのは13日の未明だというのだけれど、あれは1時半か2時くらいかな、寮の部屋で学生運動の組織の会議をやっていたんです。わあわあ議論をしていたら、窓の外を見た者が「あっ、火の粉が飛んでいる」と騒いだ。

司 会 そうすると、まだ起きていたんですね。

吉 川 もちろん、まだ起きていました。寮生はほとんど起きています。

司 会 夜はね。昼間は寝ているんでしょう。(笑)

吉 川 火の粉が飛んでいるのを見て騒ぎ始めたら、寮内放送で寮長が「国大が火事だ」と放送しました。そこで皆で見に行ったら校舎の第一棟(事務・講義棟)が燃えていました。



炎上する学芸学部鎌倉校舎  
(昭和40.1.14付 神奈川新聞)



上の写真は火災の10日ほど前の校舎



下は同一アングルで撮った被災後の写真

司 会 ではその時点で消防は来ていますね。  
 吉 川 うーん、どうだったかな。  
 司 会 消防が来ると交通規制しますよね。  
 吉 川 うん、その規制も後では見ましたが、その時はどうだったかな。なにしろ燃えている近くまで行けたのだから。消防が来たのと同時ぐらいに行っただけかも。

小 関 交通規制しても道路の方からやるから、寮の方からは行けたのかもかもしれないね。

司 会 私たちのクラスはもう就職していましたが、研究会などで同級生に会うと「おい、あの不出来な卒論が灰になって良かったな」と言い合いました。若かったとはいえ、その程度の認識だったのですね。

小 関 私は家が横浜だったので、寮にいた友人からの連絡で校舎が焼けたことを知りました。火事で成績の書類が燃えてしまったから、これは全員単位は貰えて頂きだと思いましたよ。現役の学生もその程度の意識でしたね。

吉 川 成績関係の書類が燃えてしまったのは、助かったよね。  
 司 会 校舎が焼けているということで、寮生としては何か消火活動のようなことをしたのですか。

吉 川 校舎が焼けているのはもうどうしようもないので、寮の方に延焼しないように何人かの寮生が細いホースで寮に水をかけて飛んできた火の粉を消していました。

司 会 校舎の第一棟と第二棟が焼け落ち、その後にある蒼翠寮は焼け残ったのですが、第二棟と寮の間に生物科の研究室がありましたね。あれは焼けなかったのですか。

吉 川 さあ、はっきり覚えていません。ただ火事の最中に、生物科の酒井先生が「カニが、カニが」と叫びながら生物科の研究室から昭和天皇の研究されたカニの標本を運び出そうとしていました。鬼気迫るその様子を見た寮生たちが、酒井先生に協力して標本を運び出しました。



まだ煙が残る焼けた校舎(第二棟) 奥は蒼翠寮

小 関 酒井先生は校内に住んでいたのですか。

吉 川 いや、校内には居なかったけれど、鎌倉の市内に住んでいました。

司 会 そのカニの標本は、火の中から幾分かは出せたのですか。

吉 川 全部かどうかは分からないけれど、皆で手伝ってかなり出したと思います。

司 会 ところで鎮火したのは何時頃だったのですか。

吉 川 鎮火する頃には、もう朝になっていたと思う。あの日はとても寒い朝だったので、消火の為に水を掛けたところが、すっかり凍って鉄骨からはツララが下がっていました。空気も乾いていたのでしょう。

司 会 小関さんは、鎌倉へ来て初めて状況が分かったのですか。

小 関 そうです。連絡があっても慌てて駆けつける立場でもなし。

司 会 学部長ではないんだから、駆けつけてもしょうがないしね。その頃、学部長はどなたですか。

吉 川 たしか数学科の青木先生だったのではないかな。翌年の卒業の時には青木先生でした。

司 会 とにかくこの鎌倉校舎の火災は、学部の清水ヶ丘統合に関わる重大な出来事でしたね。学部の統合の歩みをちょっと見



1月13日朝の焼け跡。右は焼け残った講堂

てみると、昭和 26 年に清水ヶ丘統合案が大学の評議会で論議されています。更に昭和 30 年には清水ヶ丘の経済学部隣接地に統合用地 3 万坪を買収しています。その後、昭和 33 年から 37 年にかけて、第 2 号館・大教室・理科系実験室などが次々に作られました。

その様子を見ると、すでに火災以前に統合計画が着々と進んでいるように見えますが、実際には学芸学部の教官や同窓会の一部に、師範以来の伝統を持つ鎌倉への愛着がかなり強くあり、統合への心理的ためらいとなっていたのではと思われます。その意味でこの火災は、それらのためらいを一挙に押し流す契機となった重大な出来事でした。

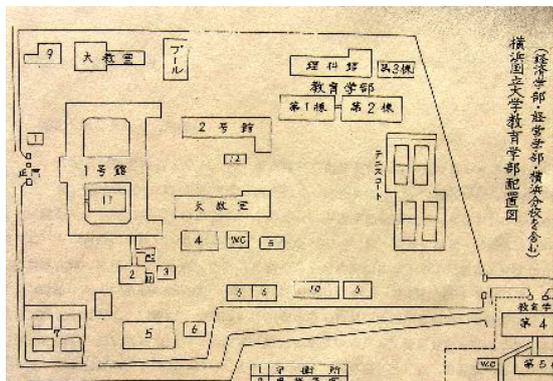
ともかくためらいも何も、校舎が焼けてしまった後では鎌倉では授業できませんからね。で、学生たちは学部の清水ヶ丘への移転統合に賛成だったのですか、反対だったのですか。

吉 川 学生たちのほとんどは、師範の雰囲気が残っている鎌倉よりも、清水ヶ丘へ移転することに賛成だったと思います。

司 会 焼けた後の授業は清水ヶ丘でやったのですか。

吉 川 そうですね。

小 関 でも、いつ授業が再開されたか覚えていません。時期的にはいわゆる学年末だから、通常でも二月頃には授業が終わりますからね。



横浜国大教育学部配置図(昭和 43 年度)

司 会 火事で校舎が焼けたのが 40 年 1 月ですから、清水ヶ丘で授業が再開されたのは 4 月からかもしれませんね。私は学生時代にはサークルの活動で毎週のように清水ヶ丘に行っていました。清水ヶ丘に学部が移ってからはほとんど行ったことがありません。ただ国語科の八島先生が定年退官されるとき「退官記念講演」を聴くために、一度だけ行ったことがあります。この清水ヶ丘の校舎配置図でいうと、移転後の授業はどの辺りで行なわれたのでしょうか。

吉 川 授業は急ぎよ建築された平屋建てのプレハブ教室で行なわれました。この図でいうと第 1 棟・第 2 棟・第 3 棟などです。しかし清水ヶ丘に来てから「学部名称変更反対闘争」が始まって、実際には授業はほとんど無かったと思います。

司 会 「名称変更」と言うのは「学芸学部」から「教育学部」に学部の名まえを変えるということですね。吉川さんの在学中はまだ学芸学部でしたか。

吉 川 そうです。最後の学芸学部でした。

小 関 教育学部と名前が変わったのは、昭和 41 年(1966)4 月ですから私が国大 4 年のときです。4 年だったので、卒業のときの学士号は「学芸学士」でも「教育学士」でも好きな方をとることが出来ました。



学部名称変更闘争中の清水ヶ丘校舎(昭和 41 年)

司 会 この写真は清水ヶ丘校舎 1 号館(経済学部)の正面入口ですね。長いビラが下がっていて「名称変更を撤回せよ」とありますが、これは何年頃の写真ですか。

吉 川 昭和 41 年の写真です。

司 会 今日見せていただいた 41.2.8 付の毎日新聞のコピーによると、「7 日の学芸学部教授会で学部の名称変更については、学生と交渉しないと決めたため、同学部自治会は 9 日から学園管理を行なうと決めた。」とあります。更に「9 日は朝から同大学の各入

り口に数十人がピケを張り、同学部の教官を大学内から締め出し、学生が作った自主カリキュラムで独自に授業を行う方針だが・・・」とあるので、この写真はその時のものですね。しかし「自主カリキュラムで独自に授業」などと書いてあるが、そんなことが出来たのですか。

吉 川 そうですね。外部から先鋭的な学者や知識人が来て講演したり、自分たちで課題を作って討論したりしましたが、なかなか自治会が考えたようにはうまく出来ませんでした。

司 会 そうすると吉川さんの学年は、40 年冬の鎌倉の火事から清水ヶ丘での名称変更反対闘争と続いて、41 年春の卒業まで勉強する暇も無かったのですね。

吉 川 40 年 1 月 6 日から始まった学部名称変更反対闘争は 2 月 9 日から大学を封鎖し、自主管理に入ったわけですが、大学入試や就職が決まっているのに卒業できない等々の問題を抱え、3 月中旬には封鎖をときました。ですから単位が欲しい科目は、授業が出来ませんでしたのでレポートを提出することによって、合格を得たわけです。

小 関 私は清水ヶ丘に行ったとき、吉川さんより 1 年下の 3 年でしたが、卒業に必要な単位はそれまでにほとんど取ってしまい、後は専門科目の「演習」くらいだったので、授業がなくてもそれほど困りませんでした。

吉 川 そう、必要な単位はもうほとんど取れていたから卒業出来たんだよね。

小 関 1,2 年生は大変だったかもしれないね。



学部名称変更反対闘争の集会で大教室に集まった学生たち(昭和 41 年 2 月頃)

- 司 会 学部移転後に直接清水ヶ丘に入学した学生は、大変だったでしょうね。
- 吉 川 それにこの後で学生運動が激しくなったから、その頃に入学した人たちはほとんど勉強していないのではないかな。
- 小 関 バリケードを組んで学内に入れなかった時代だね。私などは運動サークルにいたせいもありノンポリだったので、閉鎖された学校には行かず学生運動にはノータッチでした。学校閉鎖反対派も少数だけどいましたね。
- 司 会 「名称変更反対闘争」というのは、つまり「学芸学部」から「教育学部」への変更に反対ということでしょう。反対の理由と言うのは何なのですか。
- 吉 川 教育学部という名称に変えるのは、新制大学発足以来大切にしてきた自由な学問研究の雰囲気を見失わせ、学部の目的を教員養成に特化させ、ひいては戦前の師範教育の復活につながるのではないか、というのが反対の理由でした。私などは熱心に運動をしましたからブラックリストに載ってしまい、採用試験では見事に落ちてしまいました。
- 司 会 うーん、それは大変でしたね。でも吉川さんは無事に横浜の教員になって定年まで勤めたわけでしょう。
- 吉 川 その年の7月に市教委に呼び出されて急きょ補欠試験を受けることになりました。教職員課長のところに面接に行ったら、課長さんが「君の事は全て分かっている。しかし採用する」とのことでした。それで9月に採用されたのです。
- 小 関 あの頃は全国的に教員不足で、横浜市も全国から教員を集めるのに必死でした。国大の学生が「将来、横浜市の教員になることを誓います。」という誓約書を書く、在学中から毎月5千円の手当てをくれるのです。初任給が2万円に満たないくらいの時代ですから、今の貨幣価値でいうと5万円くらいでしょうか。そんな時代だから吉川さんも救われたのではないですか。
- 司 会 皆さんが若い情熱を傾けて、いろいろ苦労されたことは良く分かります。しかし今になって考えてみると、名称を「教育学部」と変えることがイコール「師範教育の復活」と言うのは、少し短絡に過ぎたのではないのでしょうか。
- 師範教育が、否定されるべき側面を持っていたことは確かです。「如何に教えるべきかの方法論の研究は精緻だったが、何のために何を教えるべきかという目的論や内容についての研究がほとんど無かった。」との批判はその通りだったでしょう。しかし一方で大学になってからは反対に、如何に教えるべきかとの研究が現場に出てからの研鑽に任されてしまった。あえて言うならば任され過ぎてしまった、という傾きがあるのではと感じます。
- 吉 川 そうですね。私も後に校長になってから新卒で赴任してくる若い人を見て、この人たちは教師になる覚悟と抱負を持って赴任してきたのかと、疑問を感じることもありました。師範教育の優れた点は認めて、継承していくべきだったと思います。
- 司 会 来年度の「支部だより」では、その辺の問題を取り上げるのもおもしろいし、必要なことかもしれませんね。今日は最後の方では、本日のテーマである「鎌倉校舎の火災」から少し離れて話が広がりましたが、貴重な体験談を有難うございました。これで今日の会合を終わります。



## 体験談(2) 鎌倉附属教官の見た国大火災



出席者 原田 徳夫（昭和 28 年卒）  
星野 憲三（昭和 28 年卒）

司 会 黒川 鈴谷（昭和 35 年卒）  
（写真は左から、星野・原田の各氏）

司 会 本日は昭和 40 年の国大鎌倉校舎の火災当時、鎌倉の附属におられたお二人の先生においで頂きまして、その時に体験されたことを伺いたいと思います。原田先生は当時、鎌倉の付属小におられたのですね。

原 田 そうです。私は 28 年に国大を卒業してからすぐに鎌倉の付属小に赴任し、このとき 12 年目になる古株で、2 年生の担任でした。

司 会 星野先生は附属中におられたのですか。

星 野 私は国大卒業後、横浜の港中学校に 8 年間勤務し、昭和 36 年に鎌倉の附属中学校に赴任しました。火事が起こったのは、それから 4 年後のことです。

司 会 当時私は横浜の小学校に勤務していたのですが、男子の教員には夜間の宿直がありました。附属にも宿直があったのでしょうか。

原 田 附属の一番東側の一室が附属の宿直室になっていました。私も宿直の番の時には泊まっておりました。

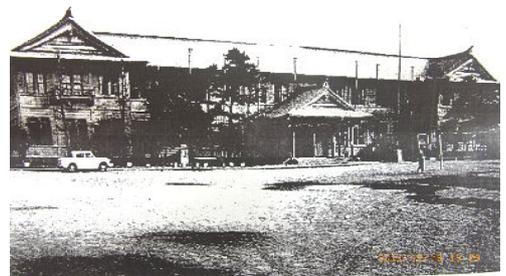
星 野 大学の事務の方にも宿直室があり、事務の人がそこで宿直していましたね。

司 会 すると火災の第一報は、宿直していた附属の先生からあったのですか。

原 田 いや、私の場合は鎌倉に住む学級代表の方からの電話でした。夜中の 12 時過ぎか、いやもう 1 時を過ぎていたか、ともかく時ならぬ時に我が家の電話が鳴り響きました。こんな時刻に何事かと電話を取ると、私のクラスの学級代表の加島綾子さんからの連絡で、「今、国大が燃えております。」とのことでした。急いで身支度し、同じ茅ヶ崎に住む同学年の対木先生に電話し、私の車で国道 134 号線を鎌倉に向かいました。

司 会 茅ヶ崎から江ノ島を通過して由比ガ浜に抜ける道ですね。

原 田 そうです。でも夢中だったので、茅ヶ崎から雪ノ下までどう走ったかよく覚えていません。電話をくれた加島さんの家が警察署の裏なので、その家の入口に車を置かせてもらい附属に駆けつけると、大学の建物はその時には既にほぼ焼け落ちていました。でも附属小も附属中も、その奥の講堂も大丈夫でほっとしました。付属小の中庭に回ると、大学の方から飛んできた燃え残りの書類の中に、学生の成績の記録の焼け焦げた断片がちらちらと見えました。今でもそれは鮮明に覚えています。



当時の国大学芸学部附属鎌倉小・中

司 会 星野先生は、大学の火事をどのようにして知られたのですか。

星 野 当日明け方の 3 時頃に自宅に「大学が燃えている」という電話がかかってきまし

た。すぐに駆けつけたかったのですが、私の家は横浜なので始発のバスが動く 6 時過ぎまで待って横浜駅に行き、駅から電車で鎌倉に向かいました。

学校に着くと附属の建物は幸い焼け残っていました。大学の建物は既に焼け落ちていましたがまだ燻っており、煙が出ていて消防車がそれに水をかけていました。所々に炭化した柱や屋根枠の一部が燃えていたり、煙を出しながら立っていたりしている状態でした。でも附属は小・中とも被害に遭わずホッとした感じでした。



燃え上がる国大芸学部校舎(昭和 40.1.13 未明)

司 会 しかし大学の建物が焼け落ちたのに、附属はよく類焼しませんでしたね。

原 田 火元は第二棟だという話も聞きましたが、伝聞なので確かかどうかは分かりません。いずれにしても八幡宮寄りの西側から火が出たことは確かで、それが校舎の東の方に広がっていきました。附属の校舎は国大の東側にあったのですが、国大と附属との間には寮に通じる道があり、その道の空間があったので附属への類焼が防がれたのでしよう。

星 野 私が校門を入った時には、附属の校舎から運び出された書類やピアノ、体育の教材等が運動場にたくさん置いてありました。附属に火災が及ぶ危険は既になくなっていましたので、私より先に到着していた教官の指示で、登校してきた附属中の生徒達が校庭に出ていた荷物を運び入っていました。

司 会 すると附属の中学生は、火災当日の朝に登校していたのですか。附属小の児童も登校したのですか。

原 田 いや、附属小の子供達には家庭連絡網で火災のことを知らせ、当日は休校としました。あの日は水曜日でしたが、いろいろ片付けや後始末などもあるので次の日も休みにしたと思います。

司 会 この火災では国大の校舎は第一棟も第二棟も焼け、その後の蒼翠寮は残ったのですが、校舎と寮の間にあった生物科の研究室は焼けたのでしょうか。それとも焼けなかったのでしょうか。星野先生は生物科のご出身だそうで、更に当時はすぐ隣の附属中におられたのでご記憶かと思えますが。

原 田 生物科の研究室は、確か焼けたのではないかな。

星 野 残念ながら焼けてしまいました。

司 会 今日、原田先生からは火災関連の貴重な写真を見せて頂いたのですが、星野先生はこの時の写真をお持ちですか。

星 野 あの火災は夜だったので、近所に住んでいた父兄の方が大きな炎に包まれて燃えている校舎をカラーで撮影し、私に渡してくれました。私も当日カメラを持っていったので、焼け跡の様子など撮影しました。



鎮火した後の焼け跡(昭和 40.1.13 朝)

三年くらい前の国大のホームカミングデーの時にこれらの写真を提供し、会場内部の広い部屋に「星野憲三提供」という札を貼って公開されました。これらの写真はまだ持っているのですが、どこかへ仕舞いこんで見つけられず、今日はも

って来られませんでした。

司 会 ところで聞くとところによると、この頃の鎌倉では学校など公共施設の火災がよく起こっていたということですが。



後片付けをする付属中生徒

原 田 鎌倉市教育委員会発行の「かまくら子ども風土記」という本がありますが、それに載っている年表を見ると、国大火災の前後に公共建築物の火災が幾つか記録されています。昭和 37 年の鎌倉市庁舎の全焼、昭和 40 年の第一小校舎の一部、昭和 41 年の第二小の教室などの火災があります。国大の火災と前後してこのような公共施設で火災が起こっていることは、放火などの事件性もなんとなく感じられるのですが、当時の木造建築では電気配線の不備による漏電

が原因の火災も多かったので、本当の原因は分かりませんね。

司 会 あの頃は木造住宅の漏電による火災というのが、よくありましたからね。ちょっと違う話題ですが、すぐ隣にあった大学の校舎が焼けたことについて、附属の先生方はどんな感想をお持ちだったかをお聞きしたいのですが。

原 田 私たち附属の教官としては、まず附属が焼けなくて良かったという気持ちでした。もし附属の校舎も焼けたということになると、大学と違って義務教育なので明日からでも授業の出来る場所を探さねばなりません。これは大変なことです。ですから附属が被災しなかったのが安心しました。大学の建物は師範以来の古い木造の建物でしたから、焼失したのは残念だが仕方なかったな、くらいの感じでした。

司 会 旧制師範学校以来の伝統ある校舎が焼けてしまい、これで従来からあった大学各学部の統合計画を、好むと好まざるとにかかわらず推進せざるを得なくなったという点で、この校舎の火災は国大の歴史の上で大きな出来事だったと思います。この後、学芸学部は清水ヶ丘に移転し翌年に教育学部と名称が変わるわけですが、附属の先生方はこの「清水ヶ丘への移転」について、賛成だったのですか反対だったのですか、それとも特に賛成でも反対でもないというお考えだったのですか。

原 田 附属としては、特に賛成でも反対でもありませんでした。私達は大学とは立場が違いますから。

司 会 しかし学部が側にあり、学生も附属の側にいる方が、教育実習などを考えてもうまくいくのではありませんか。

原 田 教育学部の附属というのは国立ですが、大学との関わりがあるのは主に学生の教育実習についてであって、その他の点では普通の公立学校と変りません。ですから学部のそばに在る方が良いということもありません。国大が清水ヶ丘に移っても、附属としては特に支障は感じませんでした。

司 会 本日は歳末ご多忙の中わざわざお集まりいただき、貴重な体験談をお聞かせ頂きまして、ありがとうございました。これで本日の集まりをお開きとさせていただきます。

